
浪漫艶話#2 『仮面舞踏会』

樹莉亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浪漫艶話#2『仮面舞踏会』

【Nコード】

N3988J

【作者名】

樹莉亜

【あらすじ】

メトロポリス東京での事件をきっかけに、賭けの代償としてジームズ・王の恋人になる羽目となった巽 ウオン 幸星 たつみこうせい は、王の実家であるメトロポリスロンドン郊外の城に遊びに来ていた。そこへ伯爵夫人から、仮面舞踏会の招待状が届けられる。王は巽を誘って舞踏会へ行くことにするのだが――。浪漫艶話シリーズ第二弾。英国ミステリ風のお話を狙って書いたなんちゃって推理小説風BL小説（↑）。王の推理が冴える（！）。

（初出：2003・5 同人誌「ストロベリー フィールズ」収録
分より転載）

（2008・8 greeサイト内日記にて、ひねもすのたり名義
で転載）

仮面舞踏会への招待状

郵便が来たのはその日の午後、ちょうどティータイムを楽しんでいる時だった。

電子メールで事が済むこの御時勢に、わざわざ紙を使うのは税金の督促状か、余程の粋人くらいのものだが、その手紙は後者だった。「マスカレードだそうだよ、幸星」

薄紫色の紙片に目を走らせて、ジェームズ・王^{ウォン}は隣の彼に声をかけた。

「……マスカレード？」

苺のフレーバーティーにまったりしていた巽^{たつみこうせい} 幸星は、一拍返事が遅れた後、続けた。

「なんだか美味しそうな名前だね」

「——マスタードでも、ママレードでも、マスカルポーネでもないよ。仮面舞踏会があるんだよ、行くかい？」

「マスカルポーネ」 大きな黒い瞳をきらきらさせている巽に、王は苦笑してみせた。

「君は花より団子だな」

メトロポリス・ロンドン中心部から、車で数時間。その内一時間強は敷地に入ってから、邸の玄関に着くまでというから、その広さが窺い知れようというものである。ロンドン郊外にあるジェームズ・王・ブルックボンド卿の城は、数百年も前に建てられた、かつて公爵家が所有していたものを、王の父、ジョセフ・ブルックボンドが譲り受けたのだった。広大な敷地の中には小さな丘や小川は勿論、一部はサファリパークになっていて、観光客にも人気を呼んでいる。城の半分は、博物館として公開されており、かつての公爵家の暮ら

しづりが見事に再現されている。

王達が生活しているのは、主に城の奥の方にあるプライベートスペースで、そこは暮らし易いよう、現代的なシステムが採り入れられていた。

二人が今いるテラスルームは中庭に面したガラス張りの部屋だった。午後の柔らかな光が王のプラチナブロンドを一層輝かせている。自家菜園で採れるというラズベリーやストロベリーに釣られて、イギリスくんだりまでほいほいついて来た巽は、今も庭の菜園で採れた苺で作った、ストロベリー・ヴィクトリア・ケーキに舌鼓を打っている最中だった。

「——クライスラー夫人を知っているかい？」

王の問いに、巽は首を横に振った。

「クライスラー伯爵家の令嬢でね、ご主人は実業家だそうだが——」
成り上がりの、とは敢えて触れずに王は先を続けた。

「夫人は一人娘だったので、伯爵家のお邸を受け継いで、今はそこで暮らしている。この城同様かなり古い建物だよ」

「へえ……そこでやるのか？ そのマスカルポーネ」

「マスカレードね。そうらしい………今晚だそうだが、どうする？」

「^{インコト}銀月が行くんなら、行く」

母方が華僑である王の中華名を呼ぶのは、彼の両親以外では巽だけに許された特権であった。王は満足そうに頷いて、もう一度招待状に目を落とす。

「なにか面白い事があるかも知れないよ」

そう言って、彼は皮肉めいた微笑を浮かべた。

伯爵夫人と首飾り

夕方から始まったパーティーは、二人が到着する頃には、かなりの盛況ぶりだった。石造りの重厚な外観とは打って変ったきらびやかな室内には、“美と退廃”というテーマに因んで、思い思いに着飾った人々が、ひしめきあっている。

ヴェニスのカーニバルよろしく、羽根飾りの沢山ついた仮面を着け、十八世紀風の大きなスカートをひきずって歩く婦人。体にぴたりとした革のボディースーツに、虹色に光るサングラスをかけた男。薄い絹のスカーフを頭からすっぽり被ってしまっている女性など、その装いはバラエティーに富んでいる。

王はいつもの様に、白地に金糸で刺繍を施した東洋風の裾の長い袍を着ていた。白磁の様に滑らかな肌に合うよう、白いシルク・シフォンの細長いスカーフを目隠しのようにして結んでいる。そうやっていてさえも、この男が人目を引かずに済むという事は無かった。「よくそれで見えるね？ 銀月」

王は巽の方を向いて、口元を笑いの形に歪めてみせ、「見えるよ」と、言った。

中世欧州風の、細かな刺繍の入った上下に、ひらひらと揺れる大振りのレース飾りが沢山ついたシャツを着た巽は、まるで陶器で出来たビスクドールのようだ。彼はちよつと肩をすくめてみせ、持ち手付きの仮面で顔を隠した。

「どうせそうやってたって、人の心の中まですっかりお見通しなんだな？」

「……まあね」

と、王は曖昧に笑った。

広いホールの中は、雰囲気を出す為に、窓には分厚いカーテンが引かれ、きらきらと光るシャンデリアのクリスタルが、微妙な陰影を落としている。

黒いドレスを着た、見事なブロンドの巻毛の女性がこちらへ来るの気付いて、王が巽に耳打ちする。

「あれがクライスラー夫人だよ」

夫人はシンプルな形ながら、全身を黒い細かなビーズで飾られた、ちらちらと光るドレスに、目の所だけ隠す、昔風の仮面を着けていた。が、なんといつても巽の目を引いたのは、彼女の首にかかった首飾りだった。うずらの卵程の大きさのルビーが五つもついた、大きな首飾りである。

「こんばんは。クライスラー夫人、ですね？」

王が愛想よく挨拶する。

「まあ、お判りになる？」

四十を幾許か越えた夫人は、若い二人に対しては、少し砕けた調子で応じた。

「ええ、判りますよ。お招きありがとうございます」

「わたくしも、貴方が誰か判っておりましてよ、男爵」

「恐れ入ります。——こちらは私の友人です。名前は——まあ、伏せておきましょうか。折角の仮面舞踏会ですから」

「はじめまして」

王の紹介に応じて巽が挨拶すると、夫人は貴族的な、つんと澄ました頭をちよつとだけ傾けて微笑した。巻毛が顔の周りでふわふわと揺れる。

「まあ、可愛い方ね。日本人かしら？」

「ええ、そうです」「わたくし、日本には行った事はありませんけれど、良い所なのでしょうね？」

「ええ、まあ——イギリスと同じ位に良い所ですよ」

巽の答えに、イギリス人の夫人は、満足そうに頷いた。

「今日は楽しんでらしてね」

そう言つと、彼女はまた、新しい客の方へと歩いて行った。

「大っきな首飾り！」

巽が呟くのを聞いて、王が同意を示すように頷いた。

「ああ、あれかい。有名だよ、色々とね」

「有名なの？」

「うん。クライスラー夫人と言えば、ルビーの首飾り。って具合にね。一年ほど前にご主人が多額の保険金をかけた事で、随分噂になったんだよ」

「へえーっ！ 保険——で、ご主人は何処にいるのさ？」

「今はいないよ」

彼は声を落として、そつと耳打ちする。

「別居中なんだよ」

それから気分を変えるようにこう言った。

「幸星が欲しいと言っんなら、一つ詭えてあげるよ？ あんな風に大きなルビーの奴を」

「うっん、いらない」

首を振って、巽はくすくす笑った。冗談だと思ったのだ。

「——そうかい」

王も笑って受け流したが、その声には少し残念そうな、寂しそうな響きが残った。

その時、ふっと目の前が真っ暗になった。

巽は驚いて、傍らの王に手を伸ばした。王がすぐにそれに応えて握り返す。急な暗闇に目が慣れず、目の前にいる筈の彼の姿すらわからない。握った手の温もりだけが頼りだった。

どこかで小さな悲鳴や、怒声が幾つか聞こえ、会場が騒然となる。

「停電……か？」

元々目隠しをした状態だった王は、巽の思考を通じて、漸く事態を飲み込んだようだ。

パツと、また突然に明りがついて、人々は一瞬安堵のため息を漏らした後、口々に感想を述べ出したので、一段とざわざわと騒がしくなる。

その時、絹を裂くような悲鳴が走った。

クライスラー夫人が、騒ぎの中央で、胸を押さえて突っ立ってい

た。

「——ない！ 無いわ。わたくしの……首飾りが……！！」

その白くて歳の割りには美しい首筋に、あの大きなルビーの首飾りは無かったのだ。

控え室の事情聴取

異達は用意された控室で、他の客達と共にぼんやりと過ごしていた。

騒ぎがあつてすぐ、誰かが警察を呼んだので、会場はすぐに閉め切られた。中にいた人々は、大した混乱も無く、警察の指示に従つて、何人かずつ別の小さな部屋に押込められ、警官の事情聴取を受けている。

部屋は客用の居間らしく、古い趣のある調度品で整えられた、落ち着いた調子の、ややもすれば重苦しい感じの部屋だった。二人の同室になったのは、中年の夫婦と若夫婦、若い女性と若い男性が二人。皆、既に仮面を取つて、思い思いの場所に、立ったり座つたりしていた。

一番大きなソファを陣取つていた中年夫婦の夫人の方は、誰彼構わずのべつまくなし喋っている。赤ら顔のでっぷりとした、形容し難い色彩のドレスを着た女だった。

「あたくし、本当にびっくりしてしまいましたわ、だって有名でしたでしょ？ ほら——あたくし思うんですよ。そうですね、間違い無いと思いますわ、だって、そうですね？」

「何が、そうなんです？」

若夫婦の亭主の方が、いらいらしたように聞いた。

「あら、だってそうでしょ。プロの仕業に決まっています！——だって、有名でしたもの、あの首飾り！」

「誰かが盗んだと、おっしゃるのね？」

若い女が聞いた。落ち着いた、低いが魅力的な声の持ち主だった。「しかし、ぼくはその時、夫人の近くにいましたけれど、さっぱり気が付きませんでしたよ」

若い男がそう口を挟むと、中年夫人は勢い込んで断言した。

「そこが、プロのプロたる所以じゃありませんの！」

「盗まれたんだと思う？」

巽は王に小声でそつと聞いた。うっかり会話に加わると、すぐさま中年夫人の相手をさせられそうだったからだ。尤も日本語で話していれば内容が漏れることはまず無いだろうが。

「さあ、判らないよ」

そつけなく答える彼に、巽は、

「判らないの？ 銀月」

と、口を尖らせてみせる。言外に含まれた意味を察して、王は苦笑した。

「ああ。あの時は君の思考を読んでいたし。それに、あれだけ大勢の人がいたら、誰が犯人か捜すのは、まるで沢山のさえずる雀の中から、鳴き声だけで一羽を捜すようなものだよ。難しいね」

「なんだよ、肝心な時に役に立たないな」

確か、彼を二度も身の危険から救い出してやったのは、つい先日の事なのだが、そんな事はすっかり忘れて、巽は不満げに言った。

「ごめんよ」

王の苦笑は更に深くなつて、なんだか哀しい顔になったので、巽は慌てた。

「いや、別にあんたが悪いって言ってる訳じゃないよ、その——」
なんと言つていいか判らずに口ごもる。

そんな顔をされると、こつちまで哀しくなってしまう。

「だいたい、あんな首飾り、盗まれたつて大した事ないもんね」

気を取り直す様にそう言つた彼に、王は驚いたようだった。切れ長の青い目が、心もち大きくなる。

「だって安物だもん！ それに保険だつてかかつてんだし」

「安物つて……あのルビーがかい？ 偽物だつて言うのかい？ 幸星？」

そう問い質しながらも、彼が嘘や思い違いでそう言っている訳ではないと、王は何故か確信していた。

「偽物っていうか、ね。ルビーはルビーなんだけどねえ」

「どう言う事？」

「あのね、ルビーって、コランダムっていう鉱物だって事くらいは知ってるよね？」

「ああ。赤いものがルビーで、青いのがサファイアだね？」

「そうそう。——で、鉱物だから結晶体になってる訳、コランダムなら六角柱ね。それをいろんな形に削ったのが、普通宝石店で見るやつ。ところが、当然、削ったら屑が出るでしょう？ 削り屑。それを集めて固めたものもあるんだよ。だから、ルビーはルビーだけど、結晶がばらばらなんだ」

「当然、質は悪い訳だね」

「段違いにね」

王は、「そうか」と、呟くと、暫く天井の隅の方を睨んでいた。

巽も真似てその辺りを見てみたが、大理石の装飾的な縁飾り意外には何も見い出せなかった。

「……しかし、君は随分宝石に詳しいんだね？」

「ああ、言わなかったつけ？ 俺の爺様、宝石細工の職人なんだよ。小さい頃から、よく爺様の工房で遊んでたんで、色々教えて貰ったの」

「なるほど、目が肥えている訳だ。だが、そうすると……」

彼が更に何か言いかけた時、丁度ノックの音がして、刑事が入って来たので、二人の話も、一人あさってな方に盛り上がっていた中年夫人の話も中断された。

ベテランらしい、四十代後半と覚しき刑事は、茶色い口髭を生やした、鋭い眼光の持ち主だった。彼は一辺り部屋を見回し、王の所で目を留めて親しげに笑った。

「ああ、これはウォンさんじゃありませんか。奇遇ですな——いや、偶然じゃありませんでしょう、ね、貴方の事だから」

「偶然ですよ、メイスン警部。私もパーティーに招待されたんです」
彼は愛想のいい笑顔で、旧知の仲らしい警部に応じた。

「知り合い？」

「ああ。私が——というより、あっちの上の方と、こっちの上の方が繋がってるんでね。メイスン警部とは、何度か一緒に仕事をした事がある」

「じゃ、あんたの正体知ってるの？」

王は答える代りに、にっこり笑ってウィンクしてみせたので、巽はフラッシュでも焚かれたみたいに目をしばたかせた。

「皆さん、申し訳ありませんが、少しばかりご協力をお願いします。まず、身元の確認のため、IDの照合と、二、三質問に答えていただきますが、よろしいでしょうか？」

警部の口調は穏やかだったが、拒絶を許さない強さがあつた。

「では、まず——そちらはウォンさんのお連れですな」

警部は巽のIDカードを受け取ると、持っていた端末にかざした。ホログラムで持ち主の顔が描かれた硬質プラスチックに、小さなチップが組み込まれたそのカードは、身元の保証から電子マネーの管理までこなす、この時代の生活には無くてはならない代物である。

警部は端末の画面と巽本人とを見比べながら、名前と職業を確認した。

「ご職業はディーラー……ですか？」

「ええ。——株じゃなくて、カジノの、ね」

「ほう——」

目を細めると、余計に鋭い目つきになる警部は、抜け目なく巽を見据える。

「随分いい稼ぎになるんでしょうな？」

「いえ、まあ……少しは」

巽は曖昧に頷いて言葉を濁した。

「事件があつた前後は、どうしていましたか？」

「ええっと、確か……広間に通されてすぐくらいに、クライスラー夫人にご挨拶をして……夫人はまた別のお客様の所へいらしたので私達はその場で少し話していました。停電があつたのは、その時で

す」

「停電が起きた時も、その場にいましたか？」

「ええ。その場にじっとしていました。——彼の手を握っていません。急に真っ暗になったので、驚いて、彼の方に手を伸ばしたんです」

ね、と振り返って巽が同意を求めたのを受けて、王が答える。

「ええ、明りがつくまで彼の手を握っていました。その場を動いたりはしませんでしたよ」

警部は口髭をなでつけながら、「そうですか」と、呟いた。それから、一人づつ順番に同じ様な質問を繰り返す。最後の中年夫婦の番になると、夫人は身を乗り出して警部に、自説に賛否を求めた。「警部さんも、プロの仕業とお思いなんですか？ あたくしはそうに違いないと、思うんですよ。そうなんですよ？」

ゴシップの好きそうな亭主と一緒にあって、期待に満ちた眼差しで見つめ返す夫婦ものに対し、警部はやけに重々しく頷いてみせた。「勿論、そういった事も考慮に入れて、目下捜査中ですのでご安心を。なにしろ仮面舞踏会の所為で、誰が誰やら判らん状態でしたので、只今捜査員が招待状と首っ引きで確認作業に追われている最中でしてね。皆さんにはもう少しの間ご協力をお願いする事に——」

「犯人は、もう逃げてしまったんじゃないませんか？」

「その可能性もありますが、まだ邸内に潜伏している可能性も残っておりますのでね、皆さんにもお手数ですが、後で簡単な持ち物検査を受けて頂けますかな？」

一同が渋々承諾するのを見てから、警部は王に目で合図を送った。連れ立って廊下に出ると、早速切り出す。

「いい所にいて下さいましたよ、ウォンさん」

警部は信頼しきった様子で言った。

「こんな状態なもんですからな、貴方がいてくれると助かります。何しろ何十人って数の人ですから、一人一人確認するだけでも大変で……で、犯人は誰だと思いですか？」

王は、「警部——」と言って、困ったように苦笑いを浮かべた。

「私も魔法使いじゃないんですから、判りませんよ。それより、警備のカメラはあったんでしょう？　何か映像に映っていなかったんですか」

「それなんですがね。あの停電はメインシステムの——つまりこの邸の様々な機器を一括管理しているシステムですが——こいつがバグを起こした所為でしてね。電気はすぐにサブシステムに切り替えたそうなんです、警備システムの方が、落っこちまったままなんですよ」

「では、停電の後の映像は無いんですか？」

「ええ。今、警備会社に来て貰って復旧作業をさせてはいますがね」「クライスラー夫人は、どうなさってるんです？」

「ええ——随分落ち込んでらっしゃいますな。今夫人の部屋で待機して貰っています」

「——夫人は、明りがついてから、首飾りを無くした事に気付いた様でした……」

王は何故か警部の頭上を通り越して、廊下の奥の方を見つめていた。

「ええ。夫人もそうおっしゃってましたな。盗まれた事には気が付かなかったそうで……」

警部も王の視線を追って後ろを振り返ったが、特別なものは何も無く、古風な間接照明が長く続く廊下の所々にオレンジ色の光を淡く灯しているだけだった。

「夫人がそうおっしゃったんですか？」

「へ？」

「盗まれたことに気付かなかった、と。」

「え、ええ。そうです……正確な言い回しはともかく、そんな内容の事を言っていましたよ」

「夫人にお話を聞くことは出来ますか？」

「ええ——そうですね。……ま、ウォンさんなら特別にいいでしょ

۲

伯爵夫人と邸の事情

通された部屋は夫人専用の居間らしく、今までの豪華な作りのそれとは違う、洗練された簡潔な部屋だった。

部屋のほぼ中央にある、卵のように丸いソファに座った彼女は、王を見るなりすぐるように手を伸ばした。差し出された纖手をそつと握り、王は一言、二言慰めの言葉を述べてから、本題に入った。

「夫人、停電が起きた時、どうしていましたか？」

「ブルックボンド卿……わたくし本当に、気が動転してしまつて、お客様にもご迷惑をおかけして、本当に申し訳ないと思つておりますのよ……」

夫人はおろおろとそう言つて、俯いた。

「いいんですよ、そんな事は。——では、首飾りに、何か変な所はありませんでしたか？」

「なんですつて？」

「つまり貴女が着けている時、停電になる前の事です。なにか、着け心地がおかしいとか、留め金が外れやすいとか、——どうも普段より軽いような気がするとか、そういう事はありませんでしたか？」

「いいえ。……特に気が付きませんでしたわ」

「そうですか……首飾りはいつもは何処に？」

「いつも金庫にしまつていますのよ。宝石箱に入れて」

「金庫を開けられるのは、夫人だけですか？」

「わたくしと主人の、眼網と指紋を登録してありますけれど……御存知でしょう？ 主人はこの邸には寄り付きませんの。もっと現代的な、機能的な家がいいんですわ。——金庫の中にはわたくしの物しか入っておりません」

「このお邸は随分と古いと伺いましたが、停電はよくある事ですかな？」

メイスン警部の質問に、夫人は頷いた。

「ええ。——ブルックボンド卿もよく御存知でしょうけれど、こういった古い城は、文化財として指定を受けておりますので、勝手に改築する事は出来無いんです。それで、配線なんかはあちらこちらに引っぱり回しておりますから、不具合がある事など、しよっちゆうですの」

王が同情して頷き、「うちもそうですよ」と言う。

「電源は、半分自家発電になっておりますのよ」

そう言つて夫人は、太陽光発電と、有機プラント熱発電で、普段の生活は殆ど賄えるという事と、今日のような催しの時だけ、電力会社から電気を買っている事などを話した。

そこへ警官が一人入つて来て、警部に警備システムの復旧作業が終つた事を告げる。

警部は王を手招きして、一緒に外へ出るよう促した。

「ウォンさん、実は今報告を受けたんですが……どうやらシステムのバグは、故意に引き起こされたようですな」

「故意ですか？」

「ええ、誰かがシステムが落ちるよう、プログラムを書き換えた形跡があつたそうです。——いよいよこいつは、プロの仕業のように思えて来ましたな」

「——もしくは内部の者の犯行とかね」

警部はすつと目を細めて、「それもありますな」と、頷いた。

「警部、クライスラー夫人の身体検査はしましたか？」

「いいえ、何故です？」

「一応、調べてみて下さい」

王が、また廊下の隅を睨みながら更に続ける。

「——とにかくそういう名目で、夫人を別室に移して下さい。我々はその間にこの部屋を調べてみましょう」

そう言つて、今出て来た扉を指す。警部はすぐさま警官の一人に指示を出すと、王を振り向いて言つた。

「ウォンさんは内部説なんですか？」

「ええ。——たぶん、首飾りは、まだ此処にありますよ」

夫人が部屋を出るとすぐ、警部と数人の警官が中を調べる。王は捜査員では無いので、一応部屋の外で待っていた。

結果はすぐに現われた。

「ありましたよ、ウォンさん！」

警部が赤く煌く物を手に、勢い込んで飛び出して来た。

「ソファの隙間に、押し込んでありました！」

「夫人が座っていた、ソファですね？」

「ええ、ええ。そうです。——しかし、どういう事ですか？ これじゃまるで……」

「ええ、たぶん……私も警部と同じ考えですよ」

王が思案顔で頷く。

暫くして、夫人が知らせを受けて戻って来た。

無事に発見された首飾りを見て、夫人は「まあ……」と、呟く。

その表情は、喜びに溢れているとは言い難いものだった。

「これは貴女が先程までいらしたソファの隙間から発見されました。これは一体——」

「警部」と、詰問しようとする彼を遮って、王は穏やかに言った。

「首飾りも無事に発見された事ですし、他のお客様はお帰りいただいても構わないでしょう？」

「え、ええ。確かに」

「皆さんの不満が出ないうちに、早く知らせて差し上げて下さい。」

——私は、ちょっと確かめたい事があるので、連れを呼んで来ます。彼は巽を連れて、すぐ戻って来た。見つかった首飾りを見せて、「さっき言っていたのは、この事だね？」

と、訊く。巽が頷くと、王は満足したように微笑んだ。

「警部、これは偽物ですよ」

「なんですって？ じゃあ、すり替えられていたんですか？」

「ええ。彼は鑑定士並みの目利きなんです。これはルビーの粉を固めて作ったもので、本物とは似て非なる、安物ですよ。恐らく本物はとつくにすり替えられていて、何処かに持ち込まれているでしょうから、そういった店か、この贋物を作った人物を捜せば、犯人が特定出来るでしょう」

「なるほど……」と、低く呟いて、警部は暫く口髭を撫でている。「判りました。調べてみましょう」

と言うと、警部は徐に立ち上がって、出て行った。

夫人の、何か物言いたげな視線を受けて、王が優しく微笑みを返す。

クライスラー夫人も微笑を見せたが、それはどこか哀しげだった。「判っていらっしゃるのね？」

彼女が静かな声でそれだけ言うと、王も「ええ」とだけ答える。青い瞳が少し、淋しい色を湛えていた。

二人はそれ以上何も言葉を交さず、異だけがわけもわからずにきよろきよろしていた。

事件解決

翌日の夜。メイスン警部がわざわざ王を訪ねて来た。

「おっしゃる通り調べましたがね、意外な人物が浮かび上がりましたよ。誰だと思います？」

「ちゃっかり夕食を平らげて、警部はそう切り出した。王がしたり顔で当ててみせる。

「クライスラー氏でしょう。夫人のご主人です」

「ははあ、さすがですな。その通りです」

「じゃあ、何？ ご主人が奥さんの首飾りを盗んじやったの？」

「デザートの苺のタルトのアイスクリーム添えの、三皿目が来るのを待っていた巽が聞いた。

「いや、夫人もこの事は了承済みさ」

「つまり、あの盗難騒ぎは、夫人の狂言だったんですな。保険金目当ての詐欺ですよ。本物のルビーはとくに売りさばいてしまっていて、更に偽物を、盗まれた事にして盗難保険を貰おうって寸法です」

「え——っ！ そうなの？！」

「幸星がああなルビーに気付かなかったら、私も騙されていたかも知れないよ。——ルビーは、最初から安物と取り替えられていた。停電は、誰かが起こしたものだ。そして夫人は、明りがつくまで盗まれたとは気付かなかったと言う。彼女は豊かな巻毛の持ち主だったし、暗闇の中で、彼女の後ろに回って、彼女に気付かれずに首飾りを盗むなんて、出来ると思うかい？」

「髪の毛に引っかけて絡まりそうな気がするね」

「そう、夫人は首飾りを自分で外したのさ」

「しかし、夫人は体にぴったりしたドレスを着てましたが、一体何処に隠していたんでしょうな？ 会場はすぐさま我々が調べました

し、……ずっとあの部屋にあっただんですかね？」

「それはね、警部」

王は咳払いを一つして続けた。

「彼女は本当は、それほど豊かな胸ではないんですよ。底上げをしてたんです」

「は？」

四十過ぎの髭親爺は、面喰らった様子で目をぱちぱちしていたが、その向かいに座っていた巽は、「あ——っ」と、大声を上げた。

「それって、ブラの中に入れる、レモン型のやつ？」

「幸星っ?! どうして君、そんな事に詳しいんだい?!」

何故か王は慌てたようにそう聞き返した。

「うちの姉様達も持つてるよ。ふかふかのとか、ゼリーが入ったのとか」

得意げに答える巽に、王がほっと胸を撫で下ろす。

「君、姉様がいるのかい? そういえば女系家族だっけね」

「うん」

警部はちよつと居心地が悪そうに、咳払いを一つした。

「……つまり、なんですか。その——底上げ部分の隙間に、首飾りをしまつてたつていうんですか? なるほど、それで身体検査をしろと言った訳ですか」

「ええ。夫人は恐らく、あらかじめ首飾りを入れられるような物を用意して、身に着けていたんでしょう。停電と同時に素早くしまつたんです。しかし、さすがに身体検査で詳しく調べられたら隠しおかせないと思つて、ソファに隠したんですね」

「いやはや、女性はやる事が大胆ですな!」

「でもどうしてそんな事したんだろう? お金持ちなんでしょ?」

巽は四皿目のデザートを平らげて聞いた。警部が、まだ食うのかと、目を丸くしている事など全く気にする様子は無い。

「伯爵家の財産の殆どは、文化財として指定を受けているからね。個人で勝手に処分する事は出来無いんだ」

「クライスラー氏には、事業の負債がかなりあったようですね。個人的にも、借金を随分していたようです。夫人は保証人になっていたんですよ」

警部はワインを一口飲んでから、疑問を口にした。

「しかし、停電の細工をしたのは、ご主人だったんですかね？」

「夫人ですよ。言っただでしょう、停電はしょっちゅう起こったんです。彼女は自分で直せるですよ。うちもそうですが、少しくらいの不具合に、いちいち業者を呼ぶのは面倒だし、費用もばかになりませんからね」

王の解説に、警部はしみじみと頷いて、ワインに染まった口髭を拭いた。

「別居していても、やはり夫の苦境に黙ってはいられなかったんでしょうな」

「そんなものですかねえ……？」

まだ若い王と巽は、ちょっと思い到らない様子で顔を見合わせる。それから、王は巽に微笑んで、

「私も愛しい人の為なら、それくらいやるかもしれないね」

と、言ったら、巽はひどくびっくりした様子で、

「胸パット？」

と、聞いた。

一瞬の沈黙の後、残る二人が腹を抱えて笑い出した事は言うまでも無かった。

終わり

事件解決（後書き）

最後までお読みくださった皆さまありがとうございます。この話は浪漫艶話（王×巽）シリーズの第二弾で、『東京狂詩曲』の続編にあたるお話です。

これを書いた当時クリスティーを良く読んでいたせいか、薄っぺらな内容を回りくどく喋るオバサマとか、名もない脇役にまで台詞を書いていた自分に感心します（笑）。初心忘れるべからず（汗）。

第三弾は、またR18サイトのムーンライトノベルズに掲載する予定ですので、よろしければそちらもご贖目にしてくださいけると、幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3988j/>

浪漫艶話#2 『仮面舞踏会』

2011年5月1日15時25分発行